皇國中學修身書 卷一

4a
110
昭14

40619
教科書文庫
4
110
41-1939
20000
81256

資料室

昭和十四年十二月十二日
文部省檢定濟
中學校修身科用

皇國中學修身書

文學博士 小西重直著

永澤金港堂發兌

廣島大學
教
81256
圖書

4a
110
昭14

廣島縣立世羅中學校
第一學年第九學級
井坂正博

凱旋觀艦式

聖德記念繪畫館壁畫

天壤無窮の神勅

豐葦原の千五百秋の瑞穗の國は是れ吾が子孫の王たるべき地なり。宜しく爾皇孫就きて治せ。行矣。寶祚の隆えまさむこと當に天壤と窮りなかるべし。

五箇條ノ御誓文（明治元年三月十四日）

一廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシ

一上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フヘシ

一官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメン事ヲ要ス

一舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ

一智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ

我國未曾有ノ變革ヲ爲ントシ　朕躬ヲ以テ衆ニ先ンシ天地神明ニ誓ヒ大ニ斯國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ立ントス衆亦此旨趣ニ基キ協心努力セヨ

教育ニ關スル勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺

風ヲ顯彰スルニ足ラン

斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ倶ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト倶ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名御璽

戊申詔書

朕惟フニ方今人文日ニ就リ月ニ將ミ東西相倚リ彼此相濟シ以テ其ノ福利ヲ共ニス朕ハ爰ニ益〻國交ヲ修メ友義ヲ惇シ列國ト與ニ永ク其ノ慶ニ賴ラムコトヲ期ス顧ミルニ日進ノ大勢ニ伴ヒ文明ノ惠澤ヲ共ニセムトスル固ヨリ內國運ノ發展ニ須ツ戰後日尙淺ク庶政益〻更張ヲ要ス宜ク上下心ヲ一ニシ忠實業ニ服シ勤儉產ヲ治メ惟レ信惟レ義醇厚俗ヲ成シ華ヲ去リ實ニ就キ荒怠相誡メ自彊息マサルヘシ

抑〻我カ神聖ナル祖宗ノ遺訓ト我カ光輝アル國史ノ成跡ト

ハ炳トシテ日星ノ如シ寔ニ克ク恪守シ淬礪ノ誠ヲ輸サハ
國運發展ノ本近ク斯ニ在リ朕ハ方今ノ世局ニ處シ我カ忠
良ナル臣民ノ協翼ニ倚藉シテ維新ノ皇猷ヲ恢弘シ祖宗ノ
威德ヲ對揚セムコトヲ庶幾フ爾臣民其レ克ク朕カ旨ヲ體
セヨ

御名御璽

明治四十一年十月十三日

内閣總理大臣副署

國民精神作興ニ關スル詔書

朕惟フニ國家興隆ノ本ハ國民精神ノ剛健ニ在リ之ヲ涵養
シ之ヲ振作シテ以テ國本ヲ固クセサルヘカラス是ヲ以テ
先帝意ヲ教育ニ留メサセラレ國體ニ基キ淵源ニ遡リ皇祖
皇宗ノ遺訓ヲ揭ケテ其ノ大綱ヲ昭示シタマヒ後又臣民ニ
詔シテ忠實勤儉ヲ勸メ信義ノ訓ヲ申ネテ荒怠ノ誡ヲ垂レ
タマヘリ是レ皆道德ヲ尊重シテ國民精神ヲ涵養振作スル
所以ノ洪謨ニ非サルナシ爾來趨向一定シテ效果大ニ著レ
以テ國家ノ興隆ヲ致セリ朕卽位以來夙夜兢兢トシテ常ニ
紹述ヲ思ヒシニ俄ニ災變ニ遭ヒテ憂悚交〻至レリ

輓近學術益〻開ケ人智日ニ進ム然レトモ浮華放縱ノ習漸ク萌シ輕佻詭激ノ風モ亦生ス今ニ及ヒテ時弊ヲ革メスムハ或ハ前緒ヲ失墜セムコトヲ恐ル況ヤ今次ノ災禍甚タ大ニシテ文化ノ紹復國力ノ振興ハ皆國民ノ精神ニ待ツヲヤ是レ實ニ上下協戮振作更張ノ時ナリ振作更張ノ道ハ他ナシ先帝ノ聖訓ニ恪遵シテ其ノ實效ヲ擧クルニ在ルノミ宜ク教育ノ淵源ヲ崇ヒテ智德ノ竝進ヲ努メ綱紀ヲ肅正シ風俗ヲ匡勵シ浮華放縱ヲ斥ケテ質實剛健ニ趨キ輕佻詭激ヲ矯メテ醇厚中正ニ歸シ人倫ヲ明ニシテ親和ヲ致シ公德ヲ守リテ秩序ヲ保チ責任ヲ重シ節制ヲ尚ヒ忠孝義勇ノ美ヲ揚ケ博愛共存ノ誼ヲ篤クシ入リテハ恭儉勤敏業ニ服シ產ヲ治メ出テテハ一己ノ利害ニ偏セスシテ力ヲ公益世務ニ竭シ以テ國家ノ興隆ト民族ノ安榮社會ノ福祉トヲ圖ルヘシ朕ハ臣民ノ協翼ニ賴リテ彌〻國本ヲ固クシ以テ大業ヲ恢弘セムコトヲ冀フ爾臣民其レ之ヲ勉メヨ

御名御璽

攝政名

大正十二年十一月十日

國務各大臣副署

昭和十四年五月二十二日　青少年學徒ニ賜ハリタル勅語

國本ニ培ヒ國力ヲ養ヒ以テ國家隆昌ノ氣運ヲ永世ニ維持セムトスル任タル極メテ重ク道タル甚ダ遠シ而シテ其ノ任實ニ繫リテ汝等青少年學徒ノ雙肩ニ在リ汝等其レ氣節ヲ尚ビ廉恥ヲ重ンジ古今ノ史實ニ稽ヘ中外ノ事勢ニ鑒ミ其ノ思索ヲ精ニシ其ノ識見ヲ長ジ執ル所中ヲ失ハズ嚮フ所正ヲ謬ラズ各其ノ本分ヲ恪守シ文ヲ修メ武ヲ練リ質實剛健ノ氣風ヲ振勵シ以テ負荷ノ大任ヲ全クセムコトヲ期セヨ

皇國中學修身書　卷一　目次

第一課　立志……一
一　人生の春　二　立志の必要　三　偉人と立志
四　立志と不撓不屈の精神

第二課　皇國……七
一　我が國の誇るべきもの　二　皇御國の意味
三　皇祖の神勅　四　君臣の分
五　盡忠報國と學生の本分　六　國難に際しては

第三課　學校……一四
一　學ぶに困難であつた時代　三　學問の目的

第四課　師の恩……一九
一　良い弟子とは　二　師恩　三　師を尊ぶ風
四　師恩に報いる道　五　舊師への消息
六　師への禮儀

第五課　朋友……二六

一 一生の道づれ　二 善を責むるは朋友の道
三 不良の交り　四 信と敬

第六課 健康……三三
一 忘れられた有難さ　二 健康の喜
三 健康と人生　四 健康の維持增進には克己を要す
五 健康より强壯へ　六 鍛錬
七 日本人の體格と體力

第七課 明朗であれ……四一
一 朗かな心　二 天空海闊的の大度量
三 明朗心を曇らす心　四 明朗な國民性

第八課 智能の啓發……四六
一 能力は錬磨によつて發達する
二 國民の智能と國家の强弱
三 昔の人の眞劍な修業ぶり　四 智能の啓發

第九課 德器成就……五四
一 智能は德が伴なはねばならぬ

二 明治天皇の御德　三 德の修養　四 修學の態度

第十課 誠……六〇
一 誠の力　二 誠とは　三 誠は善行の源泉
四 誠は藝術や學問の研究にも大切
五 誠は天地の大道　六 誠と日本國民
七 誠の德を養ふ法

第十一課 仁愛……六七
一 團體生活とおもひやり　二 人生の落伍者
三 同情心は人間固有　四 同情仁愛の心の發達
五 我が國は仁愛の國　六 尙武と仁愛

第十二課 義と勇……七四
一 義とは　二 私欲は義の敵　三 義と我が國民性
四 義と勇　五 我が國の武勇　六 勇は萬人に必要
七 勇氣養成の法

第十三課 敬と禮……八三
一 敬の心持　二 人を人として敬へ　三 禮儀作法

四　禮儀作法に對する誤解　五　禮儀作法の實行と習慣……八八
第十四課　恭儉……
一　恭儉とは　二　儉約の眞義　三　利己心からの儉約
四　物を作る苦勞を知れ　五　奢侈の害
六　御歷代天皇の御儉德
第十五課　質實剛健……九六
一　質實剛健とは　二　青年と質實剛健
三　國家盛衰の實例　四　實踐躬行
第十六課　教育に關する勅語……一〇四
一　明治天皇の教育御奬勵　二　思想界の混亂動搖
三　教育勅語御下賜　四　國體の精華・教育の淵源
五　皇運扶翼の道　六　一德

目次終

皇國中學修身書　卷一

文學博士　小西重直著

人生の春

第一課　立志

一　我等は今、喜に滿たされてゐる。見るもの聞くもの皆光榮を現はし、幸福を物語つてゐるやうである。父母の顏にも兄姉の樣子にも歡喜が溢(あふ)れてゐる。それはかねて希望してゐたこの學校へ入學が出來たからである。この嬉しさ、この幸福を思ふにつけても、父母や舊師への感謝の心と共に、これからうんと勉强せ

ねばならぬといふ責任の感が、ひし〳〵と胸に湧いて來るではないか。

立志の必要

二　四季は循環するから、一度うら枯れの冬が來ても次に再び必ず麗かな春が來る。しかし人の一生は循環しない。中學校時代は一生の春であるが、この春は一度過ぎ去つたら再び歸つて來ない。喜と希望とに滿ちてゐる今、我等は大いに覺悟する所がなくてはならぬ。

一體、人は境遇が變ると氣持も變るものである。この時を發奮の機會としなければならぬ。六年間の小學校時代を終へて、新しく中學校時代に足を一歩踏み込んだ今は、我等にとつて實に發奮すべき最良の機會

である。今こそ志を立つべき時である。

およそ何事をするにも始が大事である。殊に學問・修養に於てさうである。學問・修養の始にしつかりと目的を立てて必ず之に達しようと決心すること、これが立志である。立志は學問・修養にとつて舵の舟に於けるやうなものである。一定の方向・方針なくして進むことの無益なことは言ふまでもない。又拍車の馬に於けるやうなもので、たえず刺戟を與へてくれるものである。「志立てば學半ばす。」と言はれるほどに立志は大事である。されば昔から偉人は大抵皆早くから志を立てて將來の大成を希うてゐる。

偉人と立志

三　中江藤樹が十三歳の時「大學」を讀んで聖人の學

に志した事や、渡邊崋山が十六歳の時、學者にならうと思つたが家が貧しいので、先づ畫家となつて生活の道を得ようと繪の修業に志したことは諸子の知るところである。

賴山陽は十三歳の時、江戸に居る父に送つた手紙の中に、自作の詩を書いて歴史に名が殘るやうな人物にならうとの志を述べてゐる。

西鄕隆盛を敬服せしめた

橋本左内

越前の橋本左内は、十五歳の時、すでに志を立てて、自分を勵まし警める書物を書いてゐる。その書物の中に

稚心を去れ」と言うてゐる。左内の言ふ稚心とは、幼童が父母長上への甘え心や、依賴心の意味である。「年十三四にもなり學問に志した以上は、この稚心が殘つてゐては何事も上達せぬぞ。まして天下の豪傑にはとてもなれぬぞ」と言つてゐる。

これらの偉人だけではない。世に立派な人物と言はれる人は皆、少年時代に志を立て稚心を捨てて、努力奮鬪を續けた人である。

我等も中學生となつた今を機會として立派な人物にならう、正しい人間にならうと奮起せねばならぬ。しかし如何に志が大きくとも、それに達するには手近い所から實行して行かねばならぬ。我等は先づ中學

立志と不撓不屈の精神

生としての本分を十分盡すやうに努力しよう。

四　それには人によりかゝる依賴心を去らねばならぬ。さうして何事も出來るだけ自力でするやうにつとめよう。小學校に比べては學科目の種類も多く且、困難な科目も少くない。同時に生徒としての修練すべきいろ〳〵の事がある。勿論、それには先生達の親切な教授・指導はあるがそれにしても、不撓不屈、自ら進んでやるといふ固い心がまへがなくてはならぬ。志が立てばこの心がまへは自然に生ずるものである。「志立てば學半ばす」とは茲のことである。

○

明治天皇御製

我が國の誇るべきもの

皇御國の意味

くろがねの的いし人もあるものを
つらぬきとほせ大和だましひ

第二課　皇御國

一　我が國の誇るべきものはと言へば、先づ心に浮ぶのは我が國の風景の美であらう。地形に變化多く、且、四季の移り變りにより海や山や河や湖の眺めの美しさは、見慣れた我等の耳目をさへひきつける。まして外國人が歎美の聲を放つのは當然である。

二　しかし我が國の誇はこのやうな地上の景色だけではない。否もつとすぐれた尊いものがある。それは萬國無比の我が國體である。

我が國體の尊さ、うるはしさは「皇御國」と言ふ一語の中にこもつてゐる。「天皇」によりてすべ、治められる國であるが故に「すめらみくに」といふのである。「すめらみこと」、「すめらみくに」いかに我等の耳に辱くも尊く響く言葉であらう。

實に我が國は萬世一系の皇統を承けつぎたまふ「すめらみこと」の統べさせたまふ「すめらみくに」である。我等は「すめらみこと」に統べ治められる「すめらみたみ」である。天皇と皇國と皇民とは三にして一である。君と民とが一心一體の家族的關係をもつて一國をなしてゐる。このやうな國が世界のどこにあらうか。

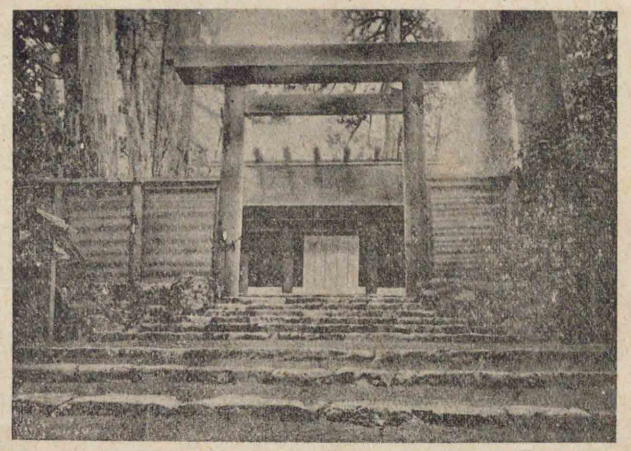
皇祖の神勅

三　皇祖天照大神は我が國を統治せしめ給ふために、皇孫瓊瓊杵尊に三種の神器を授けたまふと同時に豐葦原の千五百秋の瑞穗の國は是れ吾が子孫の王たるべき地なり。宜しく爾皇孫就きて治せ。行矣。寶祚の隆えまさむこと當に天壤と窮りなかるべし。」と、仰せられて皇孫をこの國にお降しになつた。かやうにして、萬世不易の皇國の國體が確立し、君臣の大義が定まつた。それ以來大神の御子孫に當らせられる御代代の天皇は、皇祖の神勅を奉じ給ひ、國家の繁榮と國民の幸福のため、一日も大御心を休ませ給ふことなく、常に國政に御いそしみになつた。かくて國運は次第に榮え國力も愈充實するに至つた。

勿論、長い歳月の間には國に盛衰もあり、厄難にも襲

君臣の分

皇大神宮



はれたが、常に神明の御加護があつてよくこれを征服し得て、今日の盛運に達したのである。

四　皇室に於かせられても、時運の盛衰につれて御運に多少の消長はあつたが、君臣の分は極めて明らかで、未だ曾て亂れたことなく、儼(げん)として守られて來た。支那や西洋の歴史を見てもわかるやうに、諸國の帝王は興亡常なく、新朝が興れば前朝はその臣下に落ちる。それらに比べると我が國

の皇位の尊嚴なることは無上絶對であつて世界に類例が無い。しかも、この尊嚴は、諸外國に於て見るが如く威壓を以て得た尊嚴でもなく、征服者たる尊嚴でもないことは勿論、我が國に限つては武力を以て支配したり、又支配せられたりしたものではない。みな一家に於ける家長と家族との關係にある。我等は齊(ひと)しく皇室を宗家と仰ぎ奉り、皇室は我等を赤子(せきし)として愛撫し給ふのである。

されば我が皇國は一大家族的國家であつて、君臣の間柄は、義は君臣であつて、情は父子の如くである。かくして上には御仁慈の天皇を戴き、下には誠忠の民あり、君民一體、一家族のやうな親しみの中に、萬民、堅忍和

協して國運の發展に、努力しつゝあることが、皇國の眞實の相である。

盡忠報國と學生の本分

五　このやうな萬國無比の尊い國體のもとに、その臣民として一生を送る我等の光榮と幸福とを思ふにつけて、先づ知らねばならぬことは皇國臣民としての第一の務である。それはいふまでもなく盡忠報國の務である。我等學窓にいそしむ者にとつては如何にすべきか。それは我等の日常生活に於て誠心誠意をもつて事に當るにある。學生は學生の本分を守つて勤勉努力し、家にあつては親に孝に、兄弟に友に、學校にあつては師に順、友に信、かうして他日立派な人間となることが、忠義を君國に盡すことになるのである。

國難に際しては

六　もし夫れ一朝、國難に際會することでもあるならば、身はたとひ少年であらうとも分に應じて力を盡し、祖國を守るの精神がなくてはならぬ。我等の祖先達はかゝる際にはいかなる態度で忠義の心を發揮したか。それは過去に於ける幾多の盡忠報國の美談がその良い模範を示してゐる。かくして我が「すめらみくに」の金甌無缺の國體は維持せられ、彌榮えに榮え行くのである。

○

明治天皇御製

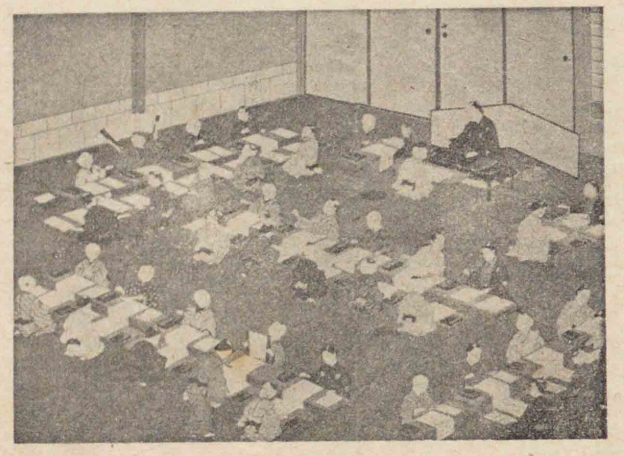
日の本の國の光のそひゆくも
神の御稜威によりてなりけり

第三課　學校

學ぶに困難であつた時代

一　「大椿は筑紫の人なり。若き時東に遊び常陸に行きて或る師に就きて四書・五經を學ぶ。始めて孟子の講義を聞く時食物足らず、或る人につきて豆一斗を求め、之を座隅にかけ、日に一握を煎りて飢を充たすのみ。かくの如くすること五十日、後將に易經の講義を聞かんとして資材乏し。之が爲に筑紫に歸り親族に錢十五貫を借り、また東に遊び遂に易經を學び終へたり云々」（臥雲日件錄。）

これは室町時代の末期のことである。學ぶに學校なく、就くに師の少かつた當時に於て、學問に志した者の困難はこれを見ても想像されよう。それが江戸時代になつて漸く學問も興り、學校も方々に建てられるやうにはなつたが、しかし學校の惠みも士階級のものに限られ、百姓商人等は程度の低い寺子屋で學ぶに過ぎなかつた。



寺子屋（東大史料編纂所藏）

それが今日では國民皆立派な學校で學ぶことが出來、邑に不學の家なく、家に不學の者なき有樣となつてゐる。この聖代の恩惠をありがたく思へば、大いに勉强せざるを得

學問の目的

ないではないか。

二　抑も學校は單に學問・技藝を學ぶだけの場所ではない。明治天皇の御下賜遊ばされた教育勅語の聖旨を奉體し、皇國の一臣民として恥づかしからぬ素養をつくる所である。

故に學校に學ぶ者は單に物事に關する知識だけを知るに止めず、何事も實踐躬行して心身の剛健强壯なる發達を期し、知識も技藝も本當に我が身についたものとし、他日、國家有用の人とならねばならぬ。

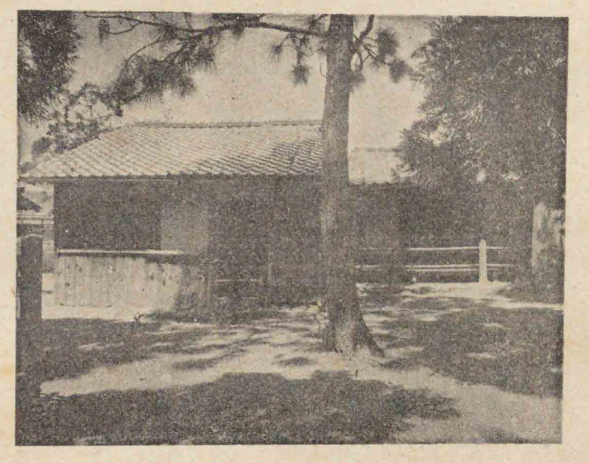
我等の學ぶ學校の目的・方針が、かくの如くであるとすれば、學校は言はゞ道を行ずる道場のやうに、神聖な修養場といはねばならぬ。茲に集る生徒はよろしく

皆心身を鍛へんとする志、學問・技藝を學ばんとする志の篤き者であらねばならぬ。生徒に心身を鍛へ、學藝を學ばうとする志が强く、師に教へ導かうとする熱意があれば、そこには自ら師弟の間のうるはしい尊信と和合とが見出されよう。師と生徒とが尊信・和合し、一校一體の有樣になつてこそ、始めて眞に立派な學校といひ得べく、眞の道場と尊ばれるのである。

かゝる校風の下には校規は自ら嚴守されよう。愛校心は自然に起るであらう。學校の名譽は自ら重んぜられよう。先輩は後輩を自ら愛し、後輩は先輩を自ら敬ふであらう。かゝる學校にこそ正しい道理と美はしい人情とが行き亙るであらう。かゝる美はしい

松下村塾

團體生活の中に於てこそ、將來世に立つ時に必要な、いろいろの德や能力も養はれる。一生交りの續く良友もかゝる學校から得られよう。國家有用の人材もこゝから輩出しよう。實に師弟の尊信・和合の精神こそは學校の生命である。



校舍の大小・美惡は問ふ所ではない。

松下村塾は師弟自ら相助けて作り上げた十八疊半のお粗末な學校であつた。しかし、この外見みすぼらしい校舍から幾多の立派な人

物を出したではないか。再び言はう、學校の生命は師弟の尊信・和合にあると。

良い弟子とは

○

明治天皇御製

おこたらず學びおほせていにしへの
人にはぢざる人とならなむ

第四課　師の恩

一　學校の目的は師弟の間の尊信・和合によつて果されて行く。師弟の尊信・和合は、先づ生徒に學ばうとする志が強くなければならぬことは前課でも述べた。いかに良い師があつても生徒に道を求め學問を修め

師恩

ようとする熱意がなければ、師の講說と教導とは馬の耳に風、豚の前の眞珠に等しい。師にとつて何よりも大切に思ふ良い弟子は、自ら鍛へ學ばうとする熱心な弟子である。

二　饑ゑて後、食べた食物にはありがたさがわかる。渴して飲んだ水には感謝の心がわく。心身を鍛錬しよう、學問を學ばうとの志のあつい者は必ず師恩を感ずることの深い生徒である。師恩を感ずる心こそ弟子道の基礎である。

假字文字さへ自由に書き得なかつた者が五六年後の今日、かくも進んだ讀書力をもつに至つたのは誰れのおかげかと自問して見よ。感謝すべき舊師が幾人も思ひ出されよう。讀書力だけではない、過去の六年間に教へられた舊師のさまざまの骨折を思へば、感恩の情なきを得ないではないか。

師を尊ぶ風

「吾に生命を與へし者は我が父、吾を良くせし者は我が師なり。」とは英雄アレキサンドル大王の言であると聞く。

まことに師は精神上の親である。師弟は心の父子である。

三　師恩は實に君父の恩についでありがたいものである。されば東洋では古來、師を尊ぶ風が篤く「七尺去つて師の影を踏まず」とさへ教へられてゐる。

明治天皇は侍講元田永孚をその亡き後にも折にふ

れて想ひ出したまひ

わが爲に心つくして老人が

をしへしことは今もわすれず

と詠じ給うた。我等はこの御製を拜し奉る時、天皇の有難い大御心に胸迫るではないか。

四　およそ師にとつて最もうれしいことは、我が教へ子が立派な人物となつたのを見る時、或は善い事業を爲しとげたのを知る時である。卽ち教へ甲斐があつたと知る時である。立派な人物を弟子にもつた先生は偉大であり、かつ幸福であると言はねばならぬ。

科學界に多くの世界的の偉業を爲しとげた、野口英世と彼れの少年時代の恩師との師弟の間柄は、まこと

師恩に報いる道

野口英世

に美はしいものであつた。昔の教へ子が世界的の大學者になつて行くのを、をり〳〵のたよりで知る恩師の喜はどんなに大きかつたであらう。片田舍の無名の一教師たる恩師は偉大なる弟子野口英世をとほして不朽の人となつた。あゝ師の偉さは皆我が弟子をとほしてその偉さが世に著はれるのである。師は「緣の下の力持」に甘んじて只管弟子の養成に骨折り、弟子達の手によつて様々の仕事を國家・社會になして行く。師の喜び、師たるの滿足は茲にある。

本居宣長が師の言に感動して古事記の研究に志し、あの立派な古事記傳を書きあげた時、師たる賀茂眞淵は地下でどんなに喜んだであらうか。弟子の師に對する報恩の道はいろ〳〵あらうが、之に過ぎたるものはなからう。

舊師への消息

五　諸子は折にふれて舊師のことを思ひ出し、何くれと書いた手紙を舊師にあげたことがあるか。たとひ一葉の短いたよりでも、教へ子を思ふ舊師にとつてはどんなにうれしいことであらう。まして現在の修學の狀況や感想などを詳しく書いた手紙であつたらどうであらう。舊師は我が教へ子の魂の成長を、その手紙をくりかへし讀むことによつて知り、どんなに喜

師への禮儀

ばれるであらうか。

六　總じて禮儀正しかつた昔の風がやゝ亂れて來た今の我が國では、師に對してもぞんざい・無作法に流れる者が無いではない。歎かはしき傾向である。學問を貴び、道を重んずる心を以て學校に學ぶ者ならば、その學問その道を傳へて下さる我が師に對してどうして無作法な態度であり得よう。

○

明治天皇御製

學びえて道のはかせとなる人も
をしへのおやの惠わするな

一生の道づれ

善を責むるは朋友の道

第五課　朋友

一　長い困難な旅路を唯一人で行くのと、よい道づれがあつて行くのとの相違を想像すれば「旅は道づれ世は情」の諺はなるほどと、うなづかれる。人の一生は長い旅とも言へよう。一生の旅路にも道づれが必要である。道づれの良いのと惡いのとは、その人の幸と不幸との分れ目である。一生の道連とは言ふまでもなく朋友のことである。しかし小學校時代の友は竹馬の友とも言はれるやうに、遊びを主とする友と言つてよい。眞の友人は中學校時代から出來るのである。

二　父母・教師と我等とは目上・目下の關係であるから多少窮屈な感じが伴なふ。從つて時には十分打解けて相談しにくいこともないではない。朋友は同等の關係であるから十分打解けて相談することが出來る。故に昔から師と友とは修養に勵む人にとつては缺くべからざる二つの力だといはれてゐる。朋友はお互に善を勵ましあふのが當然の道であるから「善を責むるは朋友の道なり。」といふ格言もある。朋友に缺點・短所があれば、これを改めて善に引戻してやるのが友の責任である。しかし忠告するには言葉を慎み、態度を和げて、假にも侮る樣子があつてはならぬ。つまり善を責めるとはお互に勵ましあつて善に進むといふことである。かくして道德に、學問に、友情ある競爭

を續け行くのである。この美はしい競爭は相手の失敗・落伍を希ふやうな卑劣な競爭ではない。すべて學問の進歩人格の向上はこの「友情ある競爭」によることが多い。人のもつべき道づれはこの競爭者である。

不良の交り

三　その人を知らむとすればその友を見よ。」とか「類を以て集まる。」とかいふ諺は、友人は皆何かの點で一致してゐることを示すものである。だから良友を得ようとすれば、自分も良少年にならねばならぬ。

無賴・不良の少年の友情は、いかに親密さうに見えても、一朝何かの事で衝突すると、昨日まで兄弟のやうに親しんでゐたのが今日はもう仇敵のやうに憎みあふのが常である。彼等の交りの奥には道德がない。道

の交りではない。德を磨きあふ友ではない。ただ不良・不善の娯樂や趣味を同じうするだけの友である。我等の交りはかやうなものであつてはならぬ。

信と敬

四　教育勅語に「朋友相信シ」と、お示しになつてゐる。この信ずるとは互にその人となりを信ずるのである。眞にその人を信ずるには、その人に敬し得るところがなければならぬ。相互に敬ひ得られるほどの人柄にして始めて深く信じあへるのである。友に敬の心があればこそ、その交りは長く續くのである。

このやうに信じあひ敬しあふ友をもつ者は他日、如何なる困難に遇つても、如何なる逆境に立つても此の友の勵まし、慰めによつて元氣を失はず、更に勇を奮つ

て信ずる道に邁進出來るのである。

杉浦重剛とその友人

杉浦重剛は天皇陛下が皇太子であらせられた時、召し出されて修身科の御教授を擔任して、御進講の大任を果した人である。重剛は友誼に厚く良友も少くなかつたが、就中、小村壽太郎とは若い頃から互に敬愛する友であつた。壽太郎が借金に苦んでゐる時、他の友達と協力して、これを救うたこともあつた。壽太郎が窮乏の中にありながら、後、大臣とまで大成し得たに就ては重剛の友情に負ふ所が少くなかつた。

日露戰役當時、外務大臣であつた壽太郎は、アメリカ合衆國ポーツマスに於ける日露講和會議に全權委員の重任を帶び、國民歡呼の聲に送られて東京を出發した。この時會議に赴く壽太郎は、戰局の實情に顧みて、會議の結果が國民の過大の期待を滿たし得ないで、非難を受けるであらうと覺悟してゐた。重剛は久しく病床にあつて、その日親しく友の門出を見送ることが出來なかつたので、人に賴んで送別の言葉を傳へてもらひ、なほ壽太郎の胸中を察する餘り「たとひ如何やうの事があらうとも、飽くまで自己の信ずるところを貫け。成敗は敢へて恐れるな。」と奉書に認めたものを送つて激勵した。ポーツマスに於ける談判の結果は國民の期待した程我が國に有利でなかつたので、果してがう〳〵たる非難の聲は壽太郎の身邊を包むに至つた。重剛の家塾にゐる人々さへもその非を鳴らしたが、壽太郎を信ずることの深かつた重剛は、小村は君國あるを知つて私心なく、現下日本第一の外交官である。その日本

杉浦重剛

一の外交官がやつたのだから、あれでよい。」と言つて、いつも壽太郎を辯護した。しかし非難の聲は高まるばかりで、今や小村を辯護する者とては杉浦の外にはないとさへ言はれた。

壽太郎の同窓の者までが、外務大臣に辭職を勸告しようといきまいて重剛の所へ相談に來たが、重剛は卽座にそれを斥けて「小村なればこそあれだけにやれたのだ。辭職勸告どころか、私は彼に總理大臣にもなつてもらひたいと思つてゐる程だ。」と言つて答へた。（高等小學修身書卷二による）

○

明治天皇御製

もろともにたすけかはしてむつびあふ
友ぞ世にたつ力なるべき

第六課　健　康

忘れられた有難さ

一　何事も有り餘るほど惠まれてゐると、その貴さ有難さに氣附かぬものであるが、これを失ふ時に到つて始めてその價値を知ることが多い。

日光の惠みは餘りに遍く行渡つてゐるために、その有難さに氣附く人は少いが、それでも十日も二十日も雨天つゞきの梅雨の晴れ間には、太陽の功德を讃歎する氣持が起る。

健康の喜

二　健康の貴さも失つて見なければ分りにくい。その貴さに氣附かぬ故にともすると不衞生なことをする。それが過ぎると身體のどこかに故障が起つて

病床に呻吟する。茲に於て始めて健康の有難さに氣附くものである。併し餘りに重い病や不治の病にかかつてしまふと、如何に健康の貴さに氣附いても、もう遲い。世間にはこのやうに自分の亂暴な不衞生な生活を痛恨しながらも、空しく逝く人が如何に多いことか。諸子は健康を失つた人の苦痛を想像して見たならば、之を失はぬやうに用心するのが賢い方法であることを感ずるに相違ない。

健康と人生

三　少年時代は樂しい時代である。快活な精神、うれしい氣持、活潑な行動は少年の共通性であるが、その多くは健康から來る。少年時代を少年時代らしく樂しく送ることの出來ると否とは、主として健康と否と

による。「健康は幸福の母なり。」とは確に眞理である。勉強するにも、運動するにも、事業を營むにも、健康であることが土臺となる。如何なる英雄・聖人もこの土臺に立つて、始めてその志を達し得るのである。故に將來有爲の人物となるもならぬも、健康の如何によるといはねばならぬ。思うてこゝに至れば今まで無頓着であつた者でも、己れの健康の有難さを感謝し、今後は一層健康に注意を怠るまいと決心するであらう。

健康の維持增進には克己を要す

四　健康を維持し、增進さすには克己が必要である。寒さを厭うて厚着するのも、早起きの出來にくいのも、暴食するのも皆克己心が弱いからである。食事に「腹八分目」の諺があるのは飲食の欲を節制せよとの敎で

ある。食物に好き嫌ひ甚だしく、遂に偏食の惡習に陷つて健康を失ふ者は、幼少の頃から甘やかされて、克己心のない者に多い。志を立てた少年は口腹の欲ぐらゐに打負けてはならぬ。身體・身邊の清潔に注意すること、日光外氣に觸れること、運動・體育に勵むこと等、衞生上の種々の方法は皆克己心があつて實行し得られるのである。

健康より強壯へ

五　我等は健康維持から一歩進めて健康の增進に努め、強壯な身體になる事を理想とせねばならぬ。我等の少年時代から青年時代にかけて、一生の健康の基礎が作られるものである。たとひ生れつきの薄弱な者であつても、此の時代の發奮努力次第で強壯な者になり得るのである。強壯を期するには、勇を奮つて運動し、身體の各部を鍛錬することが肝心である。體操・教練・作業に熱心であるべきは勿論、勉學を妨げず體質を超えない程度に於て登山・水泳等で體力を錬り、鬼をもひしぐ體軀と體力とを養ふべきである。殊に武道の修業は、體力を鍛へると同時に精神を錬ることに於て優れたものである。武道によつて鍛へられた人は、筋肉が固く引締り、身體の各部が平均に發達して、總ての動作に敏捷となると共に、精神的にも沈着で、不意の出來事や不慮の災厄に遇つてもうろたへない。

鍛錬

六　我が國民はその身長・體重に於ては遺憾ながら歐米人に比べて遜色がある。しかし、たとひ形の上に

昭和十一年ベルリンのオリンピック競技場に入場する日本選手

於て短小であらうとも、内に充實した氣力があり、技にすぐれてゐるならば憂ふるに足りない。否、短小なるが故に作業敏活で長大な者に優ることも少くない。

國際オリンピック競技に於ける我が選手の活動振りを見ても、我が國が始めて參加した頃の成績に比べると、最近の成績のすばらしさは内外共に驚歎するところである。體力に於て假りに一歩を讓るとしても、その氣力の熱烈なるに於ては體格巨大なる歐米人

日本人の體格と體力

に對して些のひけも取らないのである。鎖國の夢から醒めて僅々七八十年にして歐米の強國に比肩し得るに至つたのも、一つはこの氣力がすぐれてゐたからであつた。この大事な氣力こそは、健康と鍛錬とに負ふところが最も大なることを忘れてはならぬ。

七　武士道は我が國の精華であつて、その精華を發揮した我等祖先の體格・體力は、皆堂々たるものであつた。試みに古人の着用した甲冑その他の附屬武具の一揃を身につけて見よ、今の我等は歩行するだけでも困難であらう。然るに昔の武士達はこれを着て戰場を縱横に馳驅したのであつた。遺傳の原理から推しても、祖先に劣らぬ體格・體力が得られないといふ道理

はない。故に我等は質實・剛健を旨とし、鍛錬・修業を積み必ず祖先に劣らぬ體格・體力を得べきである。

抑も健康の問題は單に己れ一人の問題ではない。實に一國の盛衰・興亡に關する重大問題である。現今、國民の體位向上について、種々の方法が講ぜられるのもこれがためである。されば我等は我が國民全體の體格・體力の向上のためにも、自分の健康に深く注意し、強壯な身體を理想とせねばならぬ。

○

明治天皇御製

みち〳〵につとめいそしむ國民の
身をすくよかにあらせてしがな

朗かな心

天空海闊的の大度量

第七課　明朗であれ

一　一天晴れわたつた青空を見上げると、身も魂もすが〳〵しく自ら朗かに又、おほらかな心になる。山上又は海岸に立つて、地平線上から悠々と昇る朝日を眺めてゐると、爽やかな、廣やかな氣持に滿たされる。人はいつでも青空を見あげる時や、朝日を眺める時のやうな朗かな氣分でゐられたら、どんなに幸福であらう。

二　一體、身は健康で心に何の屈託もない少年の心は、明朗であるべきはずである。快活、天眞爛漫、洒々落落、陽氣と言ふやうな氣持・性質は明朗な心と相通ずる

ものである。かやうな明るい朗かな心の人は周圍の人々の心をも明るくする。氣分は傳染る。一家に明朗な人がゐれば他の者も自ら明朗な心持になる。陰鬱な人やいら〳〵する人がゐれば周圍の人も陰鬱になり、いら〳〵する。されば明朗は自身の爲だけでなく、他人の爲にも明朗にならうと心がけねばならぬ。

明朗な人は物にこせつかず、おほやうである。常に物の見方が積極的で物を苦にしない。希望に輝いて努力する。

かやうな人は目上の人にも友達にも愛せられ、目下の者には慕はれ敬はれる。長じて天空海闊的の大度量ある人になるのも明朗の少年に多いのである。

明朗心を曇らす心

三　明朗心を曇らす心

明朗心を曇らし傷ける心は怒る心、憎む心、恨む心、羨む心、妬む心、貪る心、惜しむ心、疑ふ心、恥ぢる心、憂へる心等々である。これらの心は大抵人の性質を傷けるものである。しかし過あらば悔み恥ぢるがよい。恥ぢて直ちに懺悔し、自白して再び犯すまいと誓ふがよい。徒らにくよ〳〵と思ひ惱むが故に明朗さを失ふのである。しかし虚榮から起きる恥ぢる心はよくないことである。自分の衣服や住居や食物が、友に比べて劣るのを恥ぢる如きがそれである。苟も學問に志ある者が衣服や住居の粗末が何であらう。食物は榮養さへ取れればよいではないか。不幸に出くはして憂へる事はいたし方がない。しかし人力の如何と

もしがたい事を徒らに心配するのは笑ふべきことである。明朗な人はまごころを以て事に當り、心にやましい所がなく、所謂人事を盡して天命を俟つ。」と言ふ心構へをもつものである。

明朗な國民性

本居宣長

四　我が國民は古來、たえず天災地變に襲はれながら持前の快活明朗な性質を失はなかつた。明朗は我が國民性の一つの特色と言つてよい。「明き淨き心」とか「清明」などといふ言葉が昔からしば〳〵繰返されてゐるほど、まごころに充ちた明るい心は貴ばれて來た。本居宣長はかの有名な歌

敷島の大和心を人問はば
　朝日にほふ山櫻花

にて、我が大和心には快活明朗のあることを示してゐる。

我等はこのうるはしい明朗の心持を、いつももち續けるやうに心がけ、遂には天空海闊の如き大度量の人物となることを理想としたいものである。

○

明治天皇御製

あさみどり澄みわたりたる大空の
　廣きをおのが心ともがな

第八課　智能の啓發

能力は錬磨によつて發達する

一　鍛冶屋の腕の筋肉は隆々ともりあがつてゐる。漁師の眼は我等の見えぬ遠方の海の色で魚群の存在を知ると言ふ。盲人の耳は我等の聞きがたい音をも聞きわける。ピアノの鍵盤上を走る音樂家の指の動きの微妙さを見よ。これらは皆それ〴〵の能力を錬磨した爲である。我等の能力はすべて使へば使ふほど發達する。使はねば衰へ萎む。頭腦の諸能力もこの例に漏れない。

聖代のありがたさ、教育は普及し、學ぶに學校があり、圖書館があり、新聞雜誌があり、書籍があつて我等の智

國民の智能と國家の強弱

能を啓發する機會、道具となつてくれる。唯我等に智能錬磨の熱烈な願ひと強い根氣があるか否かが問題である。たとひ生れつき智能のすぐれぬ者でも、この熱心が強く根氣があれば、智能は啓發され、怠惰に日を過す者の及びもつかぬ知識・技藝のすぐれた人にもなれるのである。

二　今の世は學問・技藝の日に進み行く文明の世界である。産業に交通に國防に衞生・醫療に、その他あらゆる方面に科學的知識が應用されて、その偉力を發揮しつゝある。これ皆、人間智能の産物である。されば國家の強弱・盛衰はその國民一般の智能の如何によること大なりと言はねばならぬ。故に我等は國家のた

めに大いに智能を磨き、何かの學問・技藝に上達して有用な人物とならなければならない。

今や支那事變は長期建設戰の時期に進展し、我等は萬難を排して聖業を貫徹すべき時である。學問・技藝の研究に於ても克己精勵、世界の文化を指導するに足る科學的知識と其の應用との進歩を圖り、國力の充實に努むべき時である。青年時代に於ける修業は皆この基礎付である。我等は大に眞劍な態度で學ばねばならぬ。

昔の人の眞劍な修業ぶり

三　我等若し自分の目指す學問・技藝・業務に於て、他にぬきん出るほどに上達しようと欲するならば、非常な努力を拂ふことを覺悟せねばならぬ。

我が國、古來の名人と言はれるほどの人々の修業ぶりこそは、我等に好模範を示すものである。

刀工でも陶工でも畫家も書家も音樂家も、名人の境にまで達した人々の若い時の修業は、烈しいものである。我等の祖先は修學・習業に於て皆名人・達人の境地に達することを理想とした。だから一技・一藝の末に至るまで何々道と呼んで、その道に精進したのである。點茶・活花も茶道・華道といつてゐる。劍術・弓術もその極意・奥義をいふ時は劍道・弓道と呼んでゐる。歌も敷島の道又は歌道と唱へてゐる。されば苟も何事でも修得しようとする者は、男兒の生涯を賭けても悔いないといふ態度で烈しい修業をつゞけたものである。

實に彼等の修業の態度・心構へは眞劍であつた。

かやうな態度・心構へで學を修め業を習うたればこそ學問の蘊奥も極められ、技藝も精妙の所まで上達し得たのである。かやうな心構へがあれば何人も皆その天分・力量に應じて農夫は篤農家となり、商人は良商となり、工藝に從事するものはそれ〴〵名人・名匠となり得るのである。

智能の啓發

四　人間の知識・才能は受身になつて、たゞ耳に聞くだけ、目に讀むだけでは啓發されるものではない。教へる者と教へられる者とが一心同體となつて實踐躬行・錬磨・鍛錬をかさねてこそ啓發されるのである。かやうにして啓發された智能こそ世の爲、國の爲に役立つものとなり得る。かゝる智能にして始めて模倣・物眞似を脱し、獨創的の仕事や考へも生ずるのである。

刀工鄕義弘の話

鎌倉時代の末に伏見天皇が全國から刀工十八人を選び出して、一振づゝの刀を鍛へさせられたことがあつた。最もすぐれたのが天皇の御守刀になるといふので、十八人の者は皆一所懸命に腕を揮つて刀を鍛へ上げた。

その頃日本一の名人と、人も許し自らも誇つてゐたのは、越中の人鄕義弘である。義弘は自分こそ必ず御守刀の選に與るに違ひないと思つてゐたが、案に相違して相模の正宗がその選にはいつた。義弘はこれを聞いて、あの正宗は刀を打つよりも世渡りの方が上手で、役人に媚びへつらつて、この光榮を得たのであらう。果してさうであればこれから相州へ行つて、一刀に斬つて棄てようと、遙々相模の鎌倉まで旅立つた。

刀鍛冶

正宗の家に近づいて先づそつと家の様子を覗ふと、仕事場に鎚の音が聞えたので、義弘はこつそり窓から中の様子をのぞいて見たところが、今までの勢は忽ち消え失せて丁寧に玄關へ行き、わが名を名乘つて正宗に面會を求めた。

正宗は義弘と聞いて、すぐに迎へ入れた。義弘は初對面の挨拶がすんでから、次のやうな懺悔話をした。「何を隱しませう、自分は今日貴殿と腕くらべをして、場合によつては貴殿を討果す覺悟で參りました。ところが今よそながら貴殿の仕事ぶりを

拜見して、自分の遠く及ばぬことを悟りました。自分は酒がすきで仕事場に酒を置くことがあり、又夏などは兩肌脱いで刀を鍛へることもあります。然るに貴殿の御様子を見ると仕事場には注連縄を張り、隅々まで祓ひ淨め、貴殿も弟子も折目正しい袴をつけて威儀堂々と鎚を執つて居られる。實に私とは雲泥の相違です。その上貴殿の眼は少しも外へそれず、身も魂も打込んで鍛へて居られる。それほどだから天下の名刀も打つことが出來ると存じます。どうか今日から貴殿の門人に加へて、心の修行をさせて下さい。」と懇に賴んだ。正宗は一旦斷つたけれども義弘が是非にと賴んだので、その熱誠に感じ遂に弟子に加へたといふ。

○

明治天皇御製

まごゝろをこめてならひし業のみは
年を經れどもわすれざりけり

第九課　德器成就

智能は德が伴なはねばならぬ

一　如何に知識が廣く、才能が勝れても、德がそれに伴なはねば却つて有害な人間になる虞がある。「知識は力なり」と言はれる。惡人がこの力をもつことは狂人に武器を與へたやうなものである。德ある人にして始めてその知識・才能は世のため國の爲にもなる。立派な人とは知識と德とを併せもつ人のことである。されば、たとひ智能が勝れてゐても德がなければ小人である。英雄と雖も德器なければそれは世を害する

明治天皇の御德

元田永孚の御進講

奸雄に過ぎない。

二　明治天皇は天資英邁にわたらせたまうたことは申すも畏し、その上になほ、早くから有識・有德の人人を召されて御修學遊ばされ、御修養を勵ませ給うたのであつた。今その侍講として召された元田永孚と副島種臣とを例に引いて御修養の御あとを偲び奉らう。

元田永孚は熊本の人。明治四年から宮內省出仕となり、日夜天皇に仕へ奉り、渾身の赤誠よく天皇を輔翼

し奉つた。天皇はもとより御叡明にわたらせられ、永孚がなくても古今稀なる御盛德にてあらせられたが、永孚あつて、いよ〳〵御盛德を御完成遊ばされた。

天皇と永孚との御間柄は實に君臣水魚とも申し上ぐべく、その御親任の深かつたことは何者にも增し、永孚また、龍顏を犯し奉りて直言申し上げた。天皇に於かせられては、永孚亡き後にも不斷に心の師をお求めになり、副島種臣に侍講をお命じになつた。種臣は畏れ多きことに思ひ、臣不肖にして帝王の師たるの器にあらず、

副島種臣

とて固く御辭退申し上げた。すると天皇は痛く驚かせ給ひ、勅使を遣して親しく次のやうな御意味の御宸翰を賜はつた。

「卿は王政復古の功臣である。朕はその功をまだ忘れてはゐない。だから卿を侍講として、大いに朕が德義を磨かうとするのである。然るに、これを避けようとするのはどういふわけであるか。朕は學問や修養のことは一年や二年でよいとは思つてゐない。一生涯つとめなければならぬと考へてゐる。だからどうか侍講となつてくれ。」

このありがたいお言葉を頂戴したとき、種臣は勅使の前をもはゞからず恐懼のあまり、その場に泣きくづ

れたといふことである。比類稀なる我が明治天皇の御盛德は、かくの如き御みづからの不斷の御精勵の結果であつたのである。畏くも一天萬乘の天皇にしてかくの如くあらせられたのであるから、臣子たるものは一日も修養を怠つてはならないはずである。

教育勅語に「智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ」と仰せられてあるが、それは明治天皇が御自身に於て實踐し給うたことであつて、まことに恐懼感激の至りである。

三　德の修養には德ある人に就くことが肝要である。その人の言行に觸れてゐると自然にその德に化せられるものである。

友達にも道の友を選ばねばならぬ。書物も自分を

德の修養

修學の態度

高めてくれるやうな良書を愛讀すべきである。又常に善い事の實踐躬行に努めねばならぬ。かくして善を思ひ善を行ふことが習慣となつて行くのである。善を思ひ善を行ふことが習慣となることが德であり、この德ある人柄となることが德器の成就である。

四　さきに修學・習業の心構へは一心不亂、眞劍であらねばならぬと言つた。かやうな態度の人は學問・技藝を修め習ふ間にも自然に德器が進みつゝあるものである。又德器の修養に心がけある者は、自然に修學・習業の心構へが眞劍になるはずである。兩者の關係は切離すことが出來ない。かくして德を進め學問・技藝を上達させてこそ、盡忠報國の實をあげることが出

來るのである。

○

明治天皇御製

われもまたさらにみがゝむ曇なき
人の心をかゞみにはして

第十課　誠

誠の力

一　德器の成就した人とは誠の心の充實した人の事である。誠こそ諸德の源であり善行の根である。誠の心から出ない行は、たとひ結果が善い事であつても、ほんたうの善とはいへない。されば明治天皇の陸海軍人に下し給うた勅諭にも忠節・禮儀・武勇・信義・質素

誠とは

の五德を諭させられて、それを貫く根本精神は誠であるとて「心誠ならされば如何なる嘉言も善行も皆うはへの裝飾にて何の用にかは立つへき心たに誠あれは何事も成るものそかし」と仰せられてある。かの「心だに誠の道にかなひなば祈らずとても神や守らん。」の古歌の意味も、「正直の頭に神宿る。」の諺も、「至誠神の如し。」の語も皆誠の德の强い力を說いたものである。

二　この力づよい誠とは如何なるものか。誠とは眞實の心である。眞言であり、眞事であり、眞心である。己れを欺かず、人を僞らぬ正直の心である。私心・利己心をはなれた純粹の心である。正しいことを行はうと努力することは、誠の心の尊い働きである。

誠は善行の源泉

三　誠は實に善行の源泉である。この心が君に向へば忠となり、親に向へば孝となり、兄に向へば悌となり、友に向へば信となり、弱い者、苦しんでゐる者に對しては慈悲・哀憐の行となる。相手の異なるに從ひ德の名は違つてゐるが、その根本は誠である。

誠は藝術や學問の研究にも大切

四　誠は道德の根本であるのみでなく、藝術や學問の世界に於ても原動力となる。至誠の一念がなくては不朽の名作や、事業は爲しとげることは出來ない。昔の刀工が名刀を鍛へる時には、神佛に祈願をこめ、精進潔齋して一心不亂になつた。その時こそは誠の心になりきつた時である。

學問に於ても同樣で、偉い學者達がまごゝろこめて

研究に努力すればこそ、幾多の眞理が發見され學問が進歩するのである。

誠は天地の大道

五　誠は諸の德の根本であり、學問や藝術の原動力であるのみではなく、實に天地の大道である。されば人の誠はよく人を感化させるのみでなく、神をも感動せしめるものである。

通事吳鳳の至誠の行爲は阿里山中の蠻族をも感化したではないか。誠の心で愛すれば猛獸でさへ馴れ親しむものである。

誠と日本國民

六　我が國に於ては古來この誠は非常に重んぜられて居る。神代に於ては「赤心」とも言はれ、文武天皇の詔の中には「明き淨き直き誠の心」といふ御言葉を拜す

るのである。久昔から我が國民が神を敬ひ、祖先を崇め尊ぶ心の篤いのも誠から出るのである。我が國民道德の根本である忠孝一本の根柢は實に誠を以て貫かれて居るのである。

誠の德を養ふ法

七　然らばいかにしてこの大切なる誠の德を養ふべきか。それには先づ常に己れを欺かぬ工夫が最も肝要である。己れを欺かぬとは己れの本心である誠の心を裏切らぬことである。それには絶えず、自分の思ふこと自分のしたことを反省する必要がある。

廣瀨淡窓の生活

廣瀨淡窓は幕末に出たすぐれた學者であつた。漢學者としても詩人としても教育家としても、一代の師表と仰がるべき立派な人格者であつた。

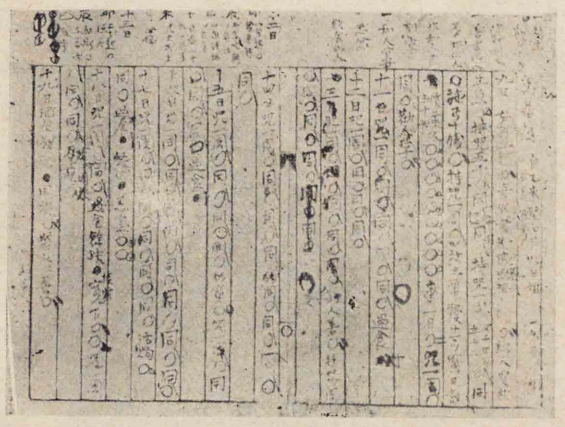
廣瀨淡窓

故にその學德を慕つて豐後の日田にあつた淡窓の私塾咸宜園に到り、教を請ふ者が前後四千餘人の多きに達し、その塾から立派な人物が輩出した。

しかし淡窓がかくすぐれた人になつたのは決して偶然ではなかつた。幼い時から學を好み、十二・三歳の頃には漢文も一通り讀め、漢詩も作れるほどの秀才であつたが、天性病弱であつたので自分の身體の弱いのと、自分の性質にも頗る缺點の多いのに氣づき、大いに反省の生活をしたのであつた。何十年間か書きつゞけた日記が八十二卷、四十二册となつて、今に殘つてゐるのを見ると、如何に修養に努めたかがわかる。こ

萬善簿

の大部の日記の外に萬善簿と題して專ら自分の言行を反省して、善行には白丸、惡行には黒丸をつけた日記を五十四歳から、死ぬ前まで、約二十ヶ年にわたり十卷も書きつゞけたのであつた。食ひ過ぎや昆蟲を殺したことまで黒丸となつてゐる。いかに反省の鋭い人であつたかが分るだらう。萬善とは死ぬまでに一萬の善行を實行しようと思ひ立つて附けた名である。遂に望み通り六十七歳の時に既に



一萬の善行を完了し、更に第二回目の一萬善の實行を志して修養に勵んだのであつた。

團體生活とおもひやり

○

明治天皇御製

鬼神もなかするものは世の中の
人のこゝろのまことなりけり

第十一課　仁　愛

一　諸子はこれまで幾度も級長とか、組長とかを選擧した事があらう。自分達の級や組の事を何くれと世話し、奔走し、代表してくれる者を選ぶには、勿論その人の學業のすぐれてゐる事も考へるであらうが、それにもまして先づ念頭に浮ぶ事は人に親切で、思ひやりの篤い、世話ずきの友人の名ではなかつたか。

實に思ひやりの篤い性質は、衆望を一身に擔つてゐる人の必ずもつてゐる性質の一つである。これに反し、如何に學業の成績がよくとも同時に亦、他にさほどの缺點がなくとも、この性質を缺いた人は、人望はおろか常に諸人から嫌はれるのである。

思ふに人と人と相集まつて營む團體生活に於て、思ひやりの心ほど大切なものは少からう。されば自分の都合ばかりを考へて、他人の迷惑・苦痛を顧みずに行動する者が、諸人から忌み嫌はれ、はてはその團體生活から排斥されるに至るのは當然である。

人生の落伍者

二　他人のことを思ひやらず、同情しない性質がひどくなると、冷酷と言はれる性質ともなるのである。

同情心は人間固有

人生の落伍者中にはこの種類の人が多い。たとひ落伍者とまでならぬとも、その一生を淋しい孤獨的な心持で送らねばならぬであらう。

三　人の憂を憂とせず、苦しむ者を見ても平氣でゐられるやうな人々のみであつたら、この世はどんなに荒んだ冷たいものであらう。しかし幸にして我等人間には苦しむ者に同情し、力のない者を助けようとの心が自然に具つてゐる。幼兒が井戸に陷らうとするのを見れば知らぬ顏して通れる人はあるまい。直ちに駈け寄つてこれを救はうとするであらう。決して名譽や利欲で助けるのではない。已むに已まれぬ同情からである。この已むに已まれぬ同情こそは仁愛

同情仁愛の心の發達

の緒であり、芽生えである。人間にこの心があればこそ互に愛し合ひ、助け合ひして平和に暮せるのである。

四　元來、同情、仁愛の心は相手の境遇が自分に近いほど起り易く、かつ深いものである。眼を病む人は盲人に同情が深い。しかし、我等の知識、經驗、道德心が進むにつれて、たとひ境遇がちがつても、見知らぬ者にでも、遠い國の人々に向つてでも同情心が起きるのである。同時に又、人間以外の生物にまでも及ぶのである。

かくして文明の進歩と共に種々の慈善事業が興り、赤十字社のやうな世界的の事業も生じ、動物愛護の運動も起つた。教育勅語に「博愛衆ニ及ホシ」と仰せられてあるのはこの精神を御奬勵になつたお言葉である。

我が國は仁愛の國

上杉謙信、武田信玄に鹽を送る圖

尚武と仁愛

五　家族的の國柄である我が國は肇國以來、上に仁愛の御德の篤い天皇を戴き、同時に惠み豐かな風土に感化されて、仁愛の心の深い國民性をもつに至つた。されば我が國は「仁國」とさへいはれるほどである。又三種の神器の中の八坂瓊曲玉は、仁の德を象られたものと解し奉る者もある。

六　尚武の國たる我が國の武士、軍人も強いだけをよいとはせぬ。「武士の情」と言武は仁愛を本とする武である。

つて仁愛の心深い武勇を理想とする。徒らに敵國の罪なき人民を苦しめるに忍びないので、敵に鹽を送つたといはれる上杉謙信のしわざは、まさしく仁愛の發露ではないか。

楠木正行は攝津阿倍野の合戰に、河に溺れて戰鬪力を失つた敵兵數百人を救ひ上げ、衣服を與へ藥をのませて返してやつたのであつた。赤十字的博愛の精神は既に正行によつて實行されてゐる。

今次の支那事變にも皇軍將兵の間に行はれた仁愛の美談はしば〳〵我等の耳にするところである。

軍神とまで呼ばれる西住大尉は、中支嘉定方面へ戰車を驅つて進擊中の野營で、捨兒を憐みミルクを與へなどして哺育保護してやつたが、母にさへ逃げられたこの薄運の赤子は遂には、はかなくなつた。大尉の心は可憐の死兒をそのまゝにして置くに忍びないので、自ら穴を掘つて埋めてやり、墓標を建ててやつた。墓標の面には墨痕鮮かに「無名子の墓」大尉の自筆である。何たるやさしさ、何たる溫情。鬼をもひしぐ我が武人達の胸の中には、かくもやさしい武士の情が潛んでゐるのである。

西住大尉

○

明治天皇御製

したさゆる冬のよどこにねざめして
衾(ふすま)かさねぬ人をこそおもへ

第十二課　義と勇

義とは

一　古來仁、義、禮、智、信は五常と言つて重んぜられた。中でも仁義の二つは道德全體の名のやうに見られたのである。その重く見られた義とはどんな意味か。

義とは正しいすぢみちである。あくまで正しい道を守り、もしこれを妨げる者があつたら、斷然これに抗し得る人は義の人である。君のため、國のために一命を捨てても盡さうとする義勇奉公の行は、義心が非常

私欲は義の敵

の場合に現はれたのである。

二　義の實行を妨げ易いものは私欲の念である。人が不正、不義を働くのは大概、私欲のためである。私利・私欲こそは義の敵(かたき)と思へばよい。知らず識らず不義に陷るのは義と不義を區別する知識がないからである。不義者に屈服するのは勇氣がないからである。我等は常に私欲を抑へて義に從ひ、知識を磨いて義と不義の區別を明らかにし、勇を養うて不義に抵抗しなければならぬ。

義と我が國民性

その國に義人が少い時は惡人跋扈(ばっこ)して秩序は亂され、平和は脅(おびや)かされる。亂世の相(すがた)はまさにそれである。

三　古來、我が國民は「正しく、直き」を重んじて來た。

これはまさしく義を貴んだことである。武士道では殊に義の德を重んじた。私利・私情を殺して義に就いた忠臣・義士は數へきれまい。武士の名乘に義家、義光、義經、義貞などと義の字を附けることの多いのを見ても、昔の武士が義を重んじたことが想像される。百姓、町人とても義理堅いものが多かつた。義農がある。義僕がある。安倍川の渡場の人夫にさへ

士規七則

義と勇

義夫があつた。

四　仁義の心の強い人には必ず勇氣がある。熊澤蕃山は「日本は仁國なり。かるが故に勇者多し」と言つてゐる。仁義と結びついた勇氣が眞の勇氣である。吉田松陰の士規七則にも「士道は義より大なるはなし、義は勇によりて行はれ、勇は義によりて長ず。」と書かれてある。

我が國の武勇

五　世界に誇る我が國人の武勇は決して好戰殺伐な勇氣ではない。仁あり義ある勇氣である。されば、戰爭も仁義の戰が多い。不義を討ち不正を懲す戰に我が國人の武勇はその力を發揮するのである。支那事變に皇軍が現はしつゝある武勇はまさしくそれで

ある。

武勇を尚ぶことは我が國、肇國の始からである。三種の神器の中に御劍があるのを見てもわかるであらう。我が國古來の偉人中には武勇すぐれた人が實に多くある。

武勇の性質が強かつたからこそ三千年來他國に侵されずによく守り來つたのである。

勇は萬人に必要

六　武勇を尚ぶ精神は軍人のみに必要なのではない。國民皆兵であるべき今の時代には老若男女、皆尚武の精神を持たねばならぬ。かくして國防の實も擧げ得られるのである。

勇は戰爭以外の時も常に必要である。およそ何事

をなすにも、抵抗や困難や危險が伴なふ事が常である。それと鬪ひそれを征服するには勇氣が要る。不意の天災危難には周章狼狽しないやうに沈勇が要る。

勇氣養成の法

七　勇氣の反對は怯懦である。臆病である。無氣力であり、薄志弱行である。怯懦を捨て臆病を去つて勇氣を得るには、どうしたらよいか。それは先づ自信をもつやうにすることである。始めて演壇に立つものは、口がどもり、足がふるへる。それは自分の演說に自信が無いからである。經驗を積み十分準備をした者は悠揚としてやれるではないか。怠け者が試驗場へはいる時の臆病さを想へ。

又、身體が弱いと元氣が出ない故に、心では進んで行

はうと思ふことでも躊躇することになりやすい。身體を健康强壯にすることも、勇氣を養成するには重要なことである。武道や體操教練などで心身を鍛錬することも最良の方法の一つである。しかし一般的に言ふならば、行を正しくして常に心にやましいことのないやうにすることが大切である。言ひかへれば義にかなつた行をすることである。

東郷平八郎少年時代の沈勇

「負けまいぞ」とやさしく、しかも凛とした聲が背後に響いた。呼びかけられたのは、筒袖に裁著袴をはいて、正清の一刀を帶び、火縄の小銃を擔うた少年東郷平八郎であつた。彼は母の聲を聞くと齊しく、振返つたので、母子の視線は期せずしてピツタリ合つた。何と云ふ劇的場面であらう。生年十七歳の

我が子の初陣を門に送る母親は、力ある一言を浴びせたのみで一滴の涙も見せず、行く少年はこれ亦莞爾として溢るゝ勇氣を目禮に示した。

東郷平八郎

時は文久三年六月二十七日の早朝、去年武藏國生麥村で起つた英人殺傷事件の强談判のため、英國艦隊司令長官キユーバ中將は、七隻の軍艦を率ゐて鹿兒島灣口に現はれた。

かねてより斯うくるだらうと覺悟してゐた薩藩の荒武者共は、われ先にと持場々々に馳せ集まつた。

東郷家では父子四人揃つて出陣し、四男平八郎は旗本勢として、藩主の本營の守護に當り左手に正清の一刀を握り、耳を

澄して砲聲の轟くを、今かゝと待つてゐた。

撃てッ！。午の刻を合圖に第一發を敵の旗艦にお見舞ひ申した。それと同時に十ケ所の砲臺八十二門の砲口は、一齊に火焔を吐いて、遮二無二撃ちだした。

いや吃驚したのは英艦の乗員共で、よもやまだ始めはすまいと多寡を括り、一同午の食卓についてスープを吸つてゐた。中に最も狼狽した艦長の如きは、錨を擧げるももどかしく、鎖を切斷して逃げだしたのであつた。斯うして沖に出て陣形を整へ、單縱陣に構へて彈著距離内へと引返した。

少年平八郎の若き血は脈管に高鳴り、腰間の正清を叩いて奔馬の念に驅られたが、役目を省みて逸る心をぢつと耐へ、前後左右に飛び來る初見參の尖頭彈を見向きもせざりし豪膽の態度には、人々驚歎の目を瞠つた。（小笠原長生の文による）

敬の心持

○

明治天皇御製

いくさ人身をかへりみず進みけむ
あとこそ見ゆれぬきし砦に

第十三課　敬と禮

一　何事のおはしますかは知らねども
かたじけなさに涙こぼるゝ

これは西行法師が伊勢神宮に參りて詠じたものと言ひ傳へられる歌である。我等は森嚴な神前に心を正し身を整へてぬかづき拜む時、何とも言ひがたい嚴粛な、虔しい、澄みきつた心持になるではないか。唯、も

う忝さに涙こぼるゝばかりである。敬の極致はこの心持である。

人を人として敬へ

二　誠ある人、德器の人は必ず敬の心の深いものである。神佛を敬し、人を敬するは勿論、物に對してもおろそかにせぬものである。

人間は人間なるが故に尊いのである。貧富・賢愚の別なく、地位の上下にかゝはらず、それ相當の敬意を以て接せねばならぬものである。乞食に物を施す時にも、侮蔑の態度で與へたら、その慈善の行に傷がつき、受ける者も心よしとしないであらう。地位や富や知識に誇つて己れより劣る者を見下す者は、人を人として尊ぶ敬の心がないからである。かやうな人の周圍に

禮儀作法

は阿諛・追從や恨みや反感が渦卷くであらう。

三　敬の心が言語・動作を通じて正しい形式によつて現はされるのが禮儀・作法である。禮は古語ではゐやと言つてある。敬ふ、うやうやしいと同じ意味のゐやまふ、ゐやゐしきのゐやである。我が國の禮の精神が敬にあることはこれでも悟れよらう。

敬の心から出る正しい禮儀・作法はこれを守る人に自ら品位を與へる。立派な服裝をしただけでは紳士とは言へぬ。どんなに粗服を着てゐても、禮儀正しい人こそは紳士である。昔、支那人が我が國を指して「東海の君子國」と稱讃したのを見ても、我が國民が禮儀正しかつたことがわかる。昔は「武士のたしなみ」と言つ

て武士には禮儀・作法が嚴重であつた。軍人勅諭にも「軍人は禮儀を正くすへし」と仰せられてある。我が軍隊の軍規が嚴正なのも、軍隊特有の禮儀・作法が守られて居るのによることが多い。

米澤藩主上杉鷹山の師であつた細井平洲は、若い時から禮儀正しい人であつた。學德、年と共に進むにつれ人品益〻氣高くなり、溫恭の態度が篤かつたので、一たび面會すると數日間はその風采が目に浮び、

細井平州とその誕生地

禮儀作法に對する誤解

長く忘れられなかつたと言ふことである。

四　若い人々にはとかく禮儀・作法を小事・末節として無視する者がある。禮儀・作法をかまはぬことが豪傑であると思つたり、男らしいと考へ、放縱・粗暴に流れる者が少くない。かうして諸人に不快の感を與へたり、迷惑をかけるのみでなく、自分の品格を傷つけ却つて人から輕蔑されるのである。

禮儀作法の實行と習慣

五　禮儀作法は時代の變遷につれて變化して行く。明治維新後、社會の有樣が一變したので、昔とは多少やり方の變つたものや、洋風生活がとり入れられたので、昔なかつた作法も生じたわけである。從つて我が國現在の作法は多少複雜である。禮儀作法に明るい人

を模範として常に實行するやうに心がけることが肝要である。機會ある毎に實行して、習慣にしてしまへば禮儀・作法は決して窮屈、面倒なものではない。

○

昭憲皇太后御歌

人として學ばざらめや鳥すらも
枝ゆづるてふ道はあるものを

第十四課　恭儉

恭儉とは

一　敬の心を失はぬ人は常に我が身を慎み、欲を制して放縱に流れるやうなことがない。何事にも適度を守り丁寧・慎重である。かやうな德を恭儉と言ふのである。

儉約の眞義

我等少年は元氣内にあふれて、とかく適度を外れ氣儘・放埒になり易い。人に向つては謙る態度がありにくく、ともすれば自慢・高慢・傲慢になりがちである。湖上の船中で得意氣に經書の講釋をした後で恥づかしい思ひをした若者と、これを靜に聽いてゐた貝原益軒の謙遜さを思ひ起してほしい。

二　恭儉の人はたとひどんな小さい日用の器物でも大事に使ふ。衣類も食物も無駄のないやうに無いやうにと注意する。つまり消費節約の生活をするのである。

恭儉の人が物を儉約するのは決して吝む心からで

はない。物を尊重しこれを十分活かして用ひようとする心からである。

抑も我等の使用し消費する一切の品物は、一物として天地・自然の力と人力とが加はつてゐないものはない。それを思へばどうしてこれを粗末にしたり、無駄につかつたりすることが出來よう。勿體なくて推戴(おしいただ)いて用ひるのが當然である。眞宗中興の祖、蓮如上人は寺の廊下に落ちてゐた紙片を、「勿體なや」と兩手にとつて推戴いたさうである。使ひ餘しの水すら無駄

蓮如上人

  type には捨てまいとそこらあたりの草花にでもかけてやるのが儉約の眞意である。

三　儉約・節約を自分の欲得からする者はメートル制の電燈ならば氣を附けるが、定額燈なれば點けつぱなしにする人である。水道の水の濫用者もかやうな心をもつ人である。電力も水道の水も皆人力の加はつてゐるものである。之を濫費することは勿體ないことだと本當に氣が附いた人は自(おのづか)ら節約せずには居られない筈である。

利己心からの儉約

四　米を最も大切に用ひるものは農家であらう。粒々(つぶつぶ)辛苦の經驗を有してゐるからである。物を大事にし節約するには物を作る勞苦を知るがよい。何物

物を作る苦勞を知れ

でも自ら骨折つて作つたことのない富貴の子弟が、物を濫費し金を無駄遣ひし易いのは當然である。今の世は必要品の多くは遠方から運ばれて來るために、その栽培され、作られてゐる現狀を見ることが少い。それ故、物を浪費し易いのである。我等は、つとめて物の作られてゐる現狀を見る必要がある。機會がある毎に諸種の工場や、農場や、果樹園等を見るがよい。

奢侈の害

五　恭儉の心の薄いものは虛榮に陷り易い。人の虛榮心は儉約の大敵である。人一たび虛榮心に囚へられると人に見せびらかすために、人に誇らうがために濫費し浪費する。奢侈・おごり・贅澤がそれである。虛榮のための濫費は段々增長してとめどがない。高

御歷代天皇の御儉德

價な外套を着るのは防寒のためでなく、その高價な品を誇らうがためである。かくして奢侈は遂に家を破り、身を亡ぼすに至るのみならず、延いては社會に害毒を及ぼすやうにもなるのである。

今や我が國は、東亞新秩序を建設すると言ふ重大時期に直面してゐる。物資の節約は實に國策の上からも大問題となつてゐる。我等はます〳〵恭儉己れを持して奢・おごりを戒め、物を節約することに努めねばならぬ。

六　我が御歷代の天皇は仁德天皇を始め奉り、御儉德の高い御方が多い。醍醐天皇・村上天皇の御儉素でおはしました話は諸子の記憶するところであらう。後三條天皇の如きは萬乘の尊き御身として、鯖の頭を

明治天皇の御儉德

炙り、これに胡椒を塗つて供御に充てたまうたと言はれてある。殊に明治天皇の御儉德に至りてはいろいろと洩れ承ることが多い。

長らくお住ひ遊ばした赤坂離宮の假皇居なども、極めて御粗末なペンキ塗の西洋館であつて、御座所は實にその中の一區を劃した四疊半の小室に過ぎなかつた。宮城に於かせられても、常の御座所の御調度品は悉く皆、御質素な物ばかりで、蒔繪のある貴重品は何一つなく、御常用のお硯箱の中には、古びたお筆や磨減らされた墨や、學生が使ふやうな、ありふれたインキ瓶があるばかりで、御卓子とお椅子との間に敷かれてある獅子の皮なども、毛色が甚だしく變色して、毛も脫落し、その獅子皮の首の邊には、お靴があたつて破れた跡を、赤犬の毛

皮で縫接してあつた。日清戰爭の時などは、一ケ年近くも廣島の大本營で軍務を見そなはせられたが、その間、肋骨のついた冬の御軍服一枚で、夏も冬もそのまゝおすごしになつたとのことであり、その後も、御生涯を通じて、軍服のほかにフロックコートも、モーニングコートも、御平常服も、何一つお持ちにならなかつたと洩れ承る。

天皇は殊のほか敷島の道に御いそしみになり、全部で九萬餘首もお詠みになつたといふことであり、多い日には、一日に四五十首も御詠草あらせられたが、それ等を御認めになるものは、上奏袋といつて大臣方より上奏御裁可を仰ぐ願書を入れて、表に主務省の名を署した袋の不用になつたものを、御手づから御切り開きになり、その裏や表へ御認めになつて、幾度となくおなほしになるのが常であつた。天皇はかくの如く

萬機の政事を聞し召されながら、一枚の反古をも疎かになし給はず、廢物を御利用遊ばされたのである。

（末松謙澄の文による）

第十五課　質實剛健

質實剛健とは

一　茲に一人の少年があるとする。その性質は、誠實で仁愛の心が篤く、義あり勇あり、その生活は質素で如何なる苦勞をも物ともせず、我が志すところに邁進するねばり、頑張る力をもつてゐる。

彼れこそは質實剛健の少年といふべきである。

質實剛健の反對の性質は輕薄・ふまじめ・奢侈・虚飾・柔弱・怠惰等の惡德である。

青年と質實剛健

質實・剛健は實に男子の特徴的美質と言うてよい。男らしさとは質實・剛健の男のことである。賴み甲斐ある人、他日爲すある有望の人はこの男らしき男の中にある。

二　一國の將來の盛衰を知るには、その國の青年の氣風を見よと言はれる。我が皇國の將來の運命を雙肩に擔つて立つべき我等にして、もし質實・剛健の氣風を失つたとしたら、我が國の前途はどうならう。一家に若しこの家風がなかつたら、その家の將來はどうならう。一校に若しこの氣風が乏しかつたら、その校運は推して知るべきである。さればこそ國民精神作興に關する詔書にも「國家興隆ノ本ハ國民精神ノ剛健ニ

在リ」と仰せられ、戊申詔書には「華ヲ去リ實ニ就キ荒怠相誡メ自彊息マサルヘシ」と仰せられ、昭和十四年五月二十二日青少年學徒に下し賜はつた勅語には「質實剛健ノ氣風ヲ振勵シ」と御諭しになつて居るのである。

國家盛衰の實例

三　實に國家の盛衰は主としてその國民に質實・剛健の氣風が強いと弱いとによる。それは古今東西の歴史が明らかに示してくれてゐる。燦然たる文化を誇つたギリシヤも、さしも強大を誇つたローマ帝國も、質實・剛健の氣風を失ふと共に亡びてしまつた。

支那の漢も唐も宋も明も清もさうであつた。殊に世界を荒しまはり、我が國にまで手を伸しかけた元でさへ、剛健の氣風を失ふと共に亡びたではないか。これに反して今の獨逸を見よ。あれほど叩きのめされたに拘らず、再び起つて今日の隆盛に至つたのは主として質實・剛健の氣風を失はなかつたからである。

我が國の歴史を辿つて見ても、この證據は到る所にある。殊に源平互に興亡する跡を見よ。「驕る平家は久しからず」の諺さへ生じたほどである。質實・剛健と言へば鎌倉武士を思ひ出させるほどの鎌倉時代もこの氣風が廢れるにつれて衰へ始め、遂に亡び去つた。

徳川家康は質實・剛健な三河武士を提げて天下を平定した。然るに、それが三百年間泰平無事の末はどうなつたか。また維新の大業に參加し活動した人々を見よ。皆これ質實・剛健の青年志士であつたではないか。

皇軍の向ふ所敵なき強さも、實に質實・剛健を旨とする嚴しい鍛錬に負ふ所頗る大である。

今や我が國は、東亞新秩序の建設と言ふ未曾有の大業に着手してゐる時である。質實・剛健の精神をますます必要とすることは多言を要しない。

四　されば男子たるものは邦家のため一旦修養に志して起つた以上は、先づこの精神の實踐躬行につとめねばならぬ。

吉田松陰の士規七則にも質實を以て要となすことが書いてある。松陰に深い感化を與へた山鹿素行も、大丈夫たるもの剛操の志がなくてはならぬと喝破してゐる。この二人に影響を深く受けたといはれる乃

實踐躬行

木大將の如きは、質實・剛健の權化ともいふべき人であつたではないか。

我等はかゝる人々を模範として日常の生活を質素に質素にと心がけ、困苦・缺乏に堪えることは質實・剛健のよい練習機會であると思はねばならぬ。登山に、運動に、諸種の勤勞作業に、剛健の氣風を養ふ機會は甚だ多く、殊に教練や體操に熱心であり、武道に精進するが如きは最も望ましいことである。

西郷南洲の生活

「西郷南洲翁の生活は誠に質素簡約で、現代の簡易生活などとは全く比較にならなかつた。住宅なども粗末を極め、僅に雨露を凌ぐを以て滿足してゐた。曾て永らく流配せられてゐた沖之永良部島から歸宅すると、その鹿兒島の邸宅は不在

中に修繕されて面目を一新してゐるのを見て喜ばず、住宅の如きは如何に粗末なるも厭ふべからずとは、予の平生教訓し置ける所である。一家子弟にして我が命を用ひなかつたら、天下の人々はどうして我が言を聞かうか。」とて、嚴重に家人を訓戒されたほどである。南洲は平生六時乃至七時に起き、八時に出て四時に歸り、大抵夜半十二時を過ぎて臥床し、少閑あれば必ず書を讀んだ。その服裝は多く飛白の筒袖に、白木綿の兵兒帶を締め、身邊のことは自らこれを始末して他人を煩はさず、役所に携帶して行く辨當の如きは、いつも味噌を塗つた拳大の握飯であつた。南洲が木戸參議からの使を受けた

西郷南洲

時、單衣を洗濯して着替が無く、赤裸の儘机に倚つて揮毫してゐた話や、宮内省に出頭した時、服裝粗野なりしために門衛に怪しまれ、雨中に立往生したことや、英國公使パークスの來訪せし折、弊衣を着て門前で草取りをして居り、パークスをして驚倒せしめた話や、その質素簡樸を傳へる佳話は少くない。

（長谷場純孝の文による）

○

明治天皇御製

波風をしのぎ〳〵て荒磯の
松はちとせの根をかためけむ

第十六課　教育に關する勅語

明治天皇の教育御奬勵

一　明治天皇は夙に國民の教育に大御心を注がせられ、明治五年に學制を頒布せしめて教育を御奬勵になり、邑に不學の戸なく家に不學の人がないやうに、奮つて學に從ふやうにと御沙汰あらせられた。このありがたい御趣意を奉體して朝野ともに教育に力をつくし、國民の普通教育は次第に普及し、又帝國大學を始め各種の專門學校を設けられるに至つた。

思想界の混亂動搖

二　かくして教育の普及進歩と同時に、やゝもすれば歐米の文明に心醉するあまり、我が國固有の文化・風習を卑しむ風を生じ、爲に忠孝・仁義の道德をすら輕んずるの傾向を來し、國民の思想は混亂動搖せざるを得なかつた。

教育勅語御下賜

三　天皇はこの有樣を深く憂へたまひ、明治二十三年十月三十日畏くも教育に關する勅語を下したまうた。

この勅語は實に我が皇祖皇宗の御遺訓に基づき、國民道德の大本をお示しになつたものである。茲に於て教育の大方針は定まり、國民はその適從するところを知り、思想上の混亂動搖は止むに至つたのである。

言ふまでもなく、この勅語はお言葉は短いが意味は深遠・廣大であるから、決して一朝一夕に說きつくされるものではないが、今その大意を三段に分つて謹解し

國體の精華教育の淵源

よう。

四　謹んで按ずるに、まづこの第一段では我が國體の本質を明らかにし、かつ我が國の教育の本づく所をお示しになつた。我が國は創建極めて舊く、天照大神の神勅によりて、萬世一系の天皇が統治したまふ世界無比の國體である。我が國はかく皇統が永く續かせ給ふ日出度い國がらであるのみならず、皇祖皇宗は御德をお立てになることが深厚で、常に政にいそしみたまひ、國家の隆昌を圖らせられたのである。

また畏くも皇祖皇宗御みづから正しき道を踐みたまうて、範を垂れさせられたのである。臣民はよく君に忠をいたし、よく父母に孝を盡し、君臣一體、忠孝一本の美風を發揮して來た。眞にこれは我が國體の精華であつて、我が國教育の本づく所も亦茲にあるのである。

皇運扶翼の道

五　第二段は明治天皇が「爾臣民」とお呼びかけになりて臣民の日々實行すべき道をお諭し下されたのである。我等臣民たるものは、先づ第一に君には忠節を盡し奉り、更に親には孝、夫婦は相和し、兄弟は仲よくし、友達は信を以て交らなければならぬ。また我が言行を愼んで欲を節し、他人に對するには博愛を以てし、學を修め業を習ひ、智能を啓發して國家の爲に働きうる人となり、善をなしうる性格を養成しなければならぬ。更に進んで、公益を廣めて世を益し、世間有用の業務を

開いて世運の進歩、國家の富强を圖り、その上常に國憲を重んじ、國法に遵はねばならぬ。殊に一旦國難が起れば義勇の精神を以て君國に奉じなければならない。以上の諸德は一つ〳〵どれでも大切であるが、我が國體精神の特色として、天壤無窮の皇運を扶翼し奉ることが最も大切であることを忘れてはならぬ。我が國を歷史的に回顧して見ても、天皇があらせられて始めて存立してゐる國家であつて、天皇を離れて、他に國家の基礎はないのである。皇運を扶翼し奉ることは、實に我等日本人の道德生活を遂げる根本である。我等がよくこれを實行することが出來たならば、上御一人に對し奉つて忠良の臣民であるのみならず、これらの

一德

諸、の道は我等の祖先が實行したことであるから、同時に祖先の美風を發揚することともなるのである。

六　第三段では全體を結ばせ給うたものと拜察し奉る。前段に於てお示しになつた道は實に皇祖皇宗の御遺訓であつて、その御子孫であらせられる天皇も、皇族も、これを御遵守あそばすのである。況や我等臣民は誠心誠意これを遵奉しなければならない。さうして、明治天皇は畏くも御みづからこれを實行し給ひ、臣民と共に道德生活を全うしようと望ませられたのである。この道は古今を通じて變ることがなく、國の內外によつて差のあるものでもない。我等は明治天皇の大御心に對へ奉る爲に、日夜、戒心・恐懼してこの道

を胸に着けて忘れぬやうに服膺しなければならぬ。

何事も上下一致して力を協せなければ立派に出來るものではない。國風の美を濟し、德を一にするためにも、國民皆共に努力しなければならないのである。

○

明治天皇御製

國の爲いよ〳〵はげめちよろづの
民もこゝろをひとつにはして

皇國中學修身書　卷一　終

昭和十四年十二月十二日
文部省檢定濟
中學校修身科用

昭和十四年九月三日印刷
昭和十四年九月七日發行
昭和十四年十二月一日訂正再版印刷
昭和十四年十二月五日訂正再版發行

皇國中學修身書　全五冊
定價　各卷　金四拾五錢

著作者　小西重直

發行兼印刷者　京都市上京區河原町通丸太町下ル伊勢屋町四百六番地　永澤信之助

印刷所　京都市下京區西洞院通七條南入　內外出版印刷株式會社

發行所　京都市上京區河原町通丸太町下ル伊勢屋町四百六番地　永澤金港堂
電話上京②二二三四六番
振替東京九八〇二二番　大阪二一三五三番

不許複製

15.7

縣立安羅中學校　一學年　井坂五博